

<<東北魂>>を鼓舞する
電子新聞

発行所 株式会社遊無有

〒 207-0015
東京都東大和市中央 1-539-15
<https://tohoku-saiko.jp/>
e-mail:y.s.yumuyu@ozzio.jp

東北再興

Re-C reate , TOHOKU!

2 0 2 5 年（ 令 和 7 年 ） 11 月 16 日 日 曜 日

無料

第162号

毎月発行

発行 2025 年（令和 7 年）11 月 16 日 日曜日

【当新聞発行責任者 兼編集長兼記者紹介】

【砂越 豊】

宮城県生まれ。72 歳の新人映像作家兼プロデューサー兼作家。趣味は古代史・縄文文化研究。現在、埋もれた歴史を掘り起こす歴史書籍の執筆開始。また、企業価値増大と IPO サポートを専門とする会社を今年 4 月に起業。電子新聞『東北再興』の発行責任者兼編集者兼記者でもある。



大谷選手は『ドジャース2連覇』牽引！

9打席9出塁などMLB史上初の数々の記録を
打ち立てたがまだまだ頂点到達にはほど遠い
来シーズンはどんな記録を打ち立てるのか？



米大リーグ・ブルージェイズとのワールドシリーズ第3戦の7回、この試合2本塁打目となる同点ソロを放ちポーズをとるドジャース・大谷翔平＝27日、ロサンゼルス（共同）

今シーズンの大谷選手の活躍の場面は、昨シーズンと同様に数えきれないほどだった。

すべての活躍を拾い上げるのはとてもむずかしいが、せめてそれらの主なもの、特に記憶に新しいポストシーズンでの活躍を思い出し

ながら、大谷選手の今シーズンを振り返ってみよう。

忘れられない十月二八日のワールドシリーズ第三戦

絶対に忘れもしないし、忘れることはできないのが日本時間の十月二八日に行われたワールドシリーズの第三戦であり、最初にこれを取り上げよう。

この試合は、ドジャースとブルージェイズが繰り広げた六時間三十九分、延長十八回という歴史的な激闘だった

が、この試合はすべての野球ファンを虜にしたことであろう。

筆者も、テレビではあるが、リアルタイムですべて夢中で観戦していた。

一勝一敗で迎えて、両軍ともに極度の緊張状態のなかでの試合だった。文字通り、その一戦はワールドシリーズ全体の勝敗を左右するものであり、選手たちは、長時間に及ぶ緊張を強いられ、疲労もかなりのものだったであろう。

さぞやヘトヘトになったであろうし、長時間の運動で筋肉が痙攣した選手もいたであろうし、何よりも空

腹にもなったであろう。

一部の選手は軽食を食べながら試合に臨んでいたほどの長時間の試合だったが、観客に最後まで飽きずに見続けさせるほどの大熱戦であった。

九打席九出塁・・・二ホームラン、二塁打二本、四連続申告敬遠、フォアボール一つ

その試合の中で、大谷選手がやってのけたことは、もはや人間業ではないとしか言いようがない。

彼は「二番・DH」として出場し、なんと一試合で九打席連続出塁という、途方もない記録を達成した。

その内訳は、本塁打が二本、二塁打が二本、そしてフォアボールが五つだった。

四長打の大活躍を見せつけられたブルージェイズのジョン・シュナイダー監督は、七回にこの日二本目の同点ソロを打たれた後、もう大谷選手と勝負すること完全に諦めた。

その結果、何と申告敬遠四つという、普通ならクレームのもので違反と言われても仕方ない方法まで駆使して大谷選手に打たせまいとしたのだ。

これは、ポストシーズン史上初という異例中の異例の策であり、大谷選手が打席に入るだけで相手チームが白旗を揚げる、その凄まじいまでの存在感を証明したものである。

最後のフォアボールも、最初からまったく勝負する気がなく、さすがに五連続申告敬遠はまずいと思っただけの、ストライクになるような投球はひとつもないような投球だった。

ポストシーズンに入ってから、どの対戦チームも大谷選手だけには絶対に打たれたくないとして、最大限の神経を使った結果、それまでは打率はかなり低調だったのではあるが、ついにこの日に大谷選手の打棒が「大爆発」したのである。

メジャー史上初の記録づくめ

とにかく、この日は記録づくめの1日だった。

まず、「九打席九出塁」はメジャー新記録ではないようだが、ポストシーズンなら話は別だ。

「二試合九出塁」は、メジャーリーグの歴史においてレギュラーシーズンを含めても最多タイ記録となることだ。

「九出塁」の記録で最も最近に達成されたのは一九四二年にスタン・ハツク（カブス）が延長十八回の試合で記録した五安打四四球だという。

なんと、八十二年ぶりのタイ記録だという。

「ポストシーズンでの四連続申告敬遠」はもちろん新記録であろう。

「二試合四長打」というのは、一九〇六年フランク・イズベル以来シリーズ史上

二人目で、実に百十九年ぶりのメジャータイ記録という。

これら以外にも、「一試合で二本塁打＆二本の二塁打＆二つの四球」はポストシーズン史上初だ。

さらに三試合でマルチ本塁打を記録するのもポストシーズン史上初。

同一シーズンでポストシーズン八本塁打は二〇二〇年コリー・シーガーに並んで球団最多記録。

ポストシーズン通算十一本塁打は松井秀喜を抜いて日本人歴代最多本塁打となった。

後々の語り草になるような試合

こうして見てくると、この一試合だけで、われわれは大谷選手のどれだけ稀有な瞬間を目撃したのかを再認識できるというものだ。

驚きを通り越して、あきれ果てて笑ってしまうほどの大記録なのである。

なのに、大谷選手は次々に記録を作り出すものだから、記録づくめが当然のように思われている。

とはいえ、もう誰とも比較のしようがないのである。しかし、これから先、ずい分時間が経過した後、二十年后くらいには、この試合を同時代に生きた人間として目の当たりにした思い出がどんなに貴重なものかが分かることだろう。

不運にも九打席九出塁の翌日に先登登板

まことに不運なことに、大谷選手は前日に九打席九出塁、試合時間六時間三十九分というほぼ二試合分の長さの試合に出ずっぱりで、しかも華々しい活躍をした翌日が「大谷投手」が先発する日となってしまった。

前日の試合が終わったのは深夜だったので、常々、

睡眠時間をたっぷり取るはずの大谷選手は睡眠不足だったはずで、しかも前日の疲労がわずか半日ほどで回復するはずもなく、そうした状況で投打二刀流を迎えることになったわけだ。しかし、そうしたことを少しも感じさせず、疲れている素振りを見せることなく、さつそうとマウンドに向かった。

シーズン中ならベンチ待機だが、大谷選手にそれを

命じるのはおぼろしい。結果的にはこの試合の負け投手になったが、出るなど说得しても無理だったであろう。大谷選手はそういう選手である。

だからこそ、今シーズンの数々の活躍のひとつにこの試合での大谷選手をあえて取り上げることにした。

四戦目に続いて七戦目にも二刀流で出場

大谷翔平投手は日本時間



第7戦でスリーランホームランを打たれてガックリする大谷選手 (cocoKARAより)

の十一月二日、ブルージェイズとのワールドシリーズ第七戦の最終戦に「一番・投手」で投打同時出場した。疲労は極度に達していたことだろう。でも投げなければならぬ、打たなければならぬ、そうした熱情だけがダビッド選手を動かしていたであろう。

しかし、三回には先制三ランを許し、三回途中五安打三失点で降板した。登板途中では、肩で息をしているのが分かった。まことに痛々しい姿だったが、これも大谷選手である。

＊

先制三ラン被弾というまさかの光景に球場では悲鳴が上がった。痛恨の一発だった。三回無死一、三塁。ビシエットに甘く入ったスライダーを捉えられた。バックスクリーン左へ伸びていく先制三ランホームラン。マウンド上でガックリと肩を落とし、両膝に手をついた。その痛恨の被弾の際に、マウンドで両手を膝につく大谷選手の姿が脳裏にこびりついて離れない。

大谷選手が人間であることを示した二試合

人間離れはしているが、人間であることを示した二試合だった。これも誇りに思おうではないか！

伝説的瞬間賞を受賞

「レジェンダリー・モーメント賞（伝説的瞬間賞）」という二〇二〇年に創設された賞がある。今シーズンの最高の名場面を讃える賞である。

現地時間十一月十二日、MLB機構はこの「レジェンダリー・モーメント賞」をMLB公式X（旧ツイッター）にて発表した。

この賞を受賞したのが大谷選手で、初受賞となった。

＊

二年連続のワールドシリーズに王手をかけて臨んだナショナルリーグの優勝決定シリーズのブリュワーズとの第四戦での活躍が受賞対象となった。

この試合で大谷選手は、投打二刀流で出場したが、打っては三本塁打、投げては十奪三振を記録した。試合は現地時間の十月

十七日、大谷は先発投手として一回表に三者連続三振を記録すると、その裏に先頭打者ホームランを放った。四回裏の第三打席では飛距離四百六十九フィート（約百四十三メートル）の場外ホームランを放った。投げては今季最多の十三振を奪って七回途中二被安打、無失点と好投した。降板直後の七回裏にはこの試合三発目のダメ押しホームラン弾を叩き込み、シ



伝説的瞬間（レジェンダリー・モーメント）賞受賞（大谷情報局より）

リーズMVPにも輝いた。いかに伝説的瞬間賞といえども、二度とこのような伝説的な成績をたたき出す選手は出現しないだろうと思う。

それほどすごい活躍だったのだ。

シーズン中の成績

ここまで述べてきたポストシーズンはともかく、今シーズン中の大谷選手の活躍もすごい。

打者として百五十八試合に出場して打率二割八分二厘、五十五本塁打、百二打点、百四十六得点、二十盗塁、OPS.104を記録。

今年六月には六百六十三日ぶりの投手復帰を果たし、十四先発で一勝一敗、防御率2.87という成績だった。

加えて、エンゼルス所属時の二〇二一年から五年連続でシーズンMVPの最終候補に入っており、日本時間十四日に受賞者発表を控えているという状況だった。

受賞すれば、四度目の受賞となり、満票での選出にも期待がかかっていた。

三年連続四度目のMVPを受賞すれば、バリー・ボンズ氏らと並ぶ偉業となる。発表は日本時間十四日午前九時。待ち遠しかった。

ついにMVP受賞

そして、ついに、ナショナルリーグのMVP受賞が満票で決まった。三年連続のMVP受賞となった。あまりにもすごい活躍であるが、なかには多少のやつかみ情報もあったので、少し心配だったが、ほんによかった。

もはや生ける伝説となった

われわれはいま、大谷選手という「生ける伝説」を見ていているのだ。

そして、さらに伝説を付け加え続けていて、来年以降もとどまることを知らない大谷翔平という野球選手を目の当たりにしているのである。

ひとつやふたつの歴史的記録なら分かりやすいが、前述の通り、あまりにもその記録が多すぎて、受け止め切れないから、そのすごさが理解できない。

人間の理解能力もはるかに超えてしまっているのだ。

そして、この大谷選手を産んだのが我が東北の岩手県奥州市である。

東北人として大いに誇りに思うべし、と国内に限らず、世界に向かって言いたいのだ。

＊

それにしても、来年春までの大谷ロス状態、すなわち、大谷選手の活躍がリアルタイムで見ることができないのは、ほんとうにさびしいかぎりである。

東北水産業の未来 その③

スルメイカ豊漁がアダとなり二転三転の大混乱発生 水揚げ場所が大きく変動した結果、漁域別水揚げ量に格差が発生して大騒動に発展したが、何とか調整して収束に向かうか？

スルメイカ豊漁までは良かったが・・・

今年はスルメイカが異例の豊漁だった。左の地図で示したように、黒潮が日本列島の太平洋側の沿岸から南の沖合に大きく離れる「大蛇行」が終息し、群れが多く生き残ったための豊漁とも言われている。

それはともかく、近年の記録的な不漁から抜けだして安定した漁獲量が確保され、食卓に手頃な価格で届くようになり、関係者全員が喜ぶかと思った矢先、とんでもない事態が発生した。**イカ漁獲量割当を早々に達成してしまった**

例年であれば、スルメイカは南の暖かい海で生まれ黒潮に乗って北上し、東北や北海道の沖まで達した後、南に戻り産卵する。

年間漁獲量は二〇〇〇年に三十万トンを超えていたが、昨年には一万八千トンまで低下した。大蛇行で餌となるプランクトンが少ない南の沖合に押し出されたのが一因とみられ、漁獲量の減少に伴い価格も上昇していた。

しかし、今年七月八月には青森県や岩手県の沖で前年同期と比べ約三〜七倍の漁獲があり、水産庁は九月に今期の漁期の漁獲枠を三十四%引き上げた。にもかかわらずあつというまに上限に達してしまったのだ。

十月に突然の休漁宣言

水産庁は、一度は引き上げたスルメイカの漁獲枠に再び達成するとし、十月下旬に小型イカ釣り船による漁の停止命令を出した。スルメイカ漁の停止を命じるのは一九九〇年代に漁

獲可能枠の制度を導入して以降初めてだという。青森県の小型イカ釣り船はさあこれからたくさん獲るぞと身構えていたが、見事に裏切られた形になった。そのため八戸市の岸壁には小型のイカ釣り船が手持無沙汰でずらりと並んでいた。獲りたくても取れないそんな状況に陥った。

小型船が取るスルメイカはこの時期に生食用として食卓や飲食店などで人気の食材となっているが、見事に当てが外れた形になった。八戸周辺のスルメイカ漁は本来であれば今月末にかけてが最盛期ということなので、早い時期での増枠と再開を訴えることにした。スルメイカ関係者は、時期が過ぎると南方にイカが南下してしまうので、出来る限り早い再開を待ち望んでいた。

イカで有名な函館は漁師の死活問題に

スルメイカといえば、全国的に有名なのが北海道の函館だ。その函館の小型イカ釣り船によるスルメイカ漁がストップしたのだ。

とはいえ、一縷の望みに賭け、いつ再開してもいいように、函館漁港では漁師が装備品の補修を続けた。しかし、函館の小型イカ釣り船の漁師たちからは悲痛な声が聞かれた。いわく、「増枠をやってもらわにゃ困る。北海道の漁師みな殺す気か？」

「すでに取った人はいいが俺たちこれからだつて。一番良いときに休んでるんだから・・・」。「こんなことしたら、個人の漁師なんて日本から消滅する」。

すでに殺氣立っていた漁師の様子が伝わってくる。そうした反応は、当然といえは当然である。

待ち望んでいた、約十年ぶりの豊漁だったが、漁獲枠を超えたという理由で、スルメイカ漁が来年三月まで「休漁」となり、目の前の豊漁のスルメイカを前に指をくわえて見ているというのに等しい。

漁協開催の説明会では、突然決まった「休漁」に漁業者から多くの戸惑いの声が相次いだという。

結局は漁獲枠増枠としたが不満の残る結果に

スルメイカは底引き網やまき網、小型漁船など漁の方法によって漁獲枠を振り分けていて、水産庁は「他の漁獲枠からの振り替えも検討

討したい」としていた。その結果、漁獲枠の超過で休漁が続いていた北海道内のスルメイカ漁が、十日に再開する見通しとなった。

上限は約四百トンで、北海道知事の権限に基づいて特例的に認める方向で調整したということである。

まずは、最悪の事態は回避できたことだろうが、多くの課題を残した。

従来の漁獲枠設定は大幅に見直す必要あり

従来からの漁獲量割当方法の見直しも当然であるが、それ以上に求められるのは、きめ細かな漁域毎の漁獲量予測情報の収集であり、割当数の設定であり、さらには状況変化に応じた柔軟な対応である。



黒潮大蛇行終了でスルメイカが豊漁と喜んでいたが・・・KYODOより



八戸市はスルメイカ漁獲量枠拡大要請へ (ABC青森朝日放送より)



水産庁はスルメイカ漁禁止命令 (TBS NEWS DIGより)



函館では11月10日からスルメイカ漁再開で水揚げ (毎日新聞より)

いま最も注意しなければならないのは『冬眠しない熊』 一番有力な情報源は熊ハンターであり他の情報に惑わされてはならない！

ツキノワグマの大きさ

頭胴長(体長)120～180cm、体重は
オス50～120kg、メス40～70kg、
最大体重173kg(ウィキペディアから)

ツキノワグマの能力

嗅覚：犬並、**視覚**：人並かそれ以上、
聴覚：高音敏感、低音鈍感、**走る速度**
は速く短時間なら時速50km程度で
走る**泳ぎ**もうまい、爪のたつ物であれ
ば垂直の壁も登ることができる（宮城
県HPより）

熊の生息エリアと住宅街の関係

- ① 本来の生息域である「奥山」には強くて大型のオス熊がいるがめったに人間の前に出て来ない
- ② 里山には強いオスに負けた弱いオスとオスを避けた親子熊がいる
- ③ 人間の食べ物の味を覚えた熊が里山から降りて住宅地に入り込むのが今最も問題となっている熊である

有効な熊対策

- ① 集団で行動する
- ② 熊が未体験の音を出す
- ③ 熊は異常に生臭いのですぐ逃げる
- ④ 走らずゆっくり後ずさりで逃げる

あまり効果が期待できない方法

- ① 『熊鈴』は万能ではない
- ② 『熊スプレー』も万能ではない
- ③ 死んだふりは効き目がない

現地に最も詳しいハンター情報に絞るべし

このところ毎日、テレビはじめあらゆるマスメディアには秋田、岩手等の熊被害情報があふれている。しかし、それらの東北の熊情報は、必要以上に不安をあおり立てるだけで、熊問題の正確な実態や有効な対策から少し外れているような気がしてならない。

そこでまず、情報を再整理するとともに、実際に熊と対峙している東北の熊ハンターの方々の『現場感覚』に根差した情報に絞り込んで対策も考えてみたい。

子熊映像ばかりで親熊の怖さが伝わらない

テレビでは住宅地に熊が出現したと大騒ぎするが、ほとんどが小さな熊ばかりで、たまにメス熊が子熊と

住宅街出現はエサ不足だけではない

ツキノワグマが住宅街に出現する理由として山にエサが少ないからだという見解が多く見受けられる。しかし、エサが豊富なエリアでも例えば、京都府の例であるが、山にエサが豊富でも熊が住宅街に出現するケースがあるようだ。

あまり出現の原因をエサ不足に絞り込みすぎると熊対策をミスリードしそうで、あるから注意が必要だ。

年率十五%で増加する熊個体数

熊対策の最前線にいる多くのハンターたちの実感では、熊の個体数が明らかに異常に増えているという。したがって、一部のエサ不足のために住宅街に出現するのではなく、個体数が急激に増加しているから、冬眠に向けて大量のエサを確保しようと住宅街にまで出現していると考えるのが自然だという見解が多いように感じる。

そのため、もともと生息域からはみ出して住宅地まで進出していると考えた方が良さそうだ。

しかし、なぜ今年になって急に住宅地への出現が増えたか不思議だったが、それは熊の自然増加率を考えると理解できる。

熊の増加は年率十五%と

ハンターの高齢化と駆除減少で増え放題

最近よく言われている熊ハンターの高齢化と人員不足であるが、これは熊の駆除率の低下に直結する。つまり熊がどんどん増加する原因となるのだ。

さらに、熊ハンターになつて熊を駆除するまでに多くの手続きが必要なようだが、まず、狩猟免許を取得し、次に銃の所持許可を得て、その後狩猟者登録をして、地域の猟友会等に所属する

早急な個体数調査と適正数までの駆除は必要

それから、厳しい指摘になるかもしれないが、近年熊出現が多発している東北の各自治体の熊の個体数調査がおろそかになっている面もあると思われる。

これが適正に行われていれば、増えすぎれば駆除して適正数に戻すのだが、増えるに任せていて、もうどうにもならないレベルにまで達したのではないのか？

したがって、遅きに失した感あれども、早急に、簡便法でも良いから、各エリアの熊個体数概算を産出する

べきであろう。

そのうえで、自衛隊や警察の熊対策チームの支援で、早急に適正水準まで駆除することが求められていると思う。

そうしないといつまでも住宅地に熊が出現し続けることになるだろう。

おそらく、各自治体の現場では、適正頭数までに駆除が必要な頭数の多さに驚いていることだろうが、やらないければ、人的被害は増加する一方なのだから、覚悟を決めることである。

だれも言わない最悪の事態…冬眠しない熊が住宅地を荒らし回る

いまは報道もされていないし、政府も東北各自治体も言及しない恐ろしい事態が近づいている予感がある。それは、冬眠しないたくさんさんの熊が住宅地を荒らし

回る状況である。

熊の冬眠は、冬にエサが無くなるからなるべくエネルギーを省力化するために熊が編み出した生存の手法である。

しかし、これは冬にエサが無くなるという前提条件のもとでの方法である。

エサがあれば、あるいはエサがあると熊が判断すれば冬眠しなくなるだろう。そうした熊が今年一挙に増加する可能性を考えただけでも空恐ろしい。

いま熊が住宅地に出現している地域は、冬は降雪地域である。

その地域で、雪の中を走り廻り、エサを求めて人家を襲撃する想定は望むところではないが、一応準備だけはしておくべきだろう。

万が一のときの対策

この恐ろしい想定の下で

は、熊はまっしぐらに人家や食料蔵を狙ってくる。あたりにエサになりそうな果物はもうないのだから当然である。

唯一といってもよい対策は、厳重な戸締りと熊の侵入を防御する対策である。

それ以外は、熊襲撃の際には、現在準備中の警察の熊駆除チームへの緊急出動要請網の整備、自衛隊の『次のステップの支援』である。いずれにしても、この想定が現実のものとなれば、大量の熊駆除は不可避となるだろう。

最後に、左最下部に、今現在、熊対策で役立つもの、万能とはいえない項目を列記した。現在流布する情報とは異なることを断っておく。

宮城県知事選挙を振り返って

稀に見る接戦

去る一〇月二六日、宮城県知事選挙が行われた。確定投票者数は、現職の村井嘉浩氏が三四〇一九〇票で当選、次点の前参議院議員の和田政宗氏の三二四三七五票とは僅か一五八一五票の差という接戦であった。以下、前宮城県議会議員の遊佐美由紀氏が一七六二八七票、前角田市職員伊藤修人氏が二〇四四五票、自営業の金山屯氏が三六六三票という結果で、村井氏が六選を果たした。

今回この選挙が全国的にも注目されたのは、共に自民党党籍を持つ村井氏と和田氏が争った「保守分裂選挙」であったこと、その和田氏が参政党の実質的な支援を受けて選挙戦を戦ったことにある。そしてさらに、SNS上に主に村井氏についての真偽不明の情報が多く流れたこともこの選挙に多くの人の目を引き付けるきっかけとなった。特に多

く拡散したと思われる「村井嘉浩の悪行一四選」とタイトルをついた画像は、「強引改革で宮城を売る」と書かれ、「悪行」が一四項目列挙されている。

地元に住んでいて日頃県政の情報に接していれば、大半が根拠のないデマであることは自ずと判断できるのだが、巧妙なのは選挙のために土葬撤回や「水道事業の運営は外資にお任せ!」や「漁業権も民間企業に開放」など、解釈によっては一面の真実を伝える内容も盛り込まれていることである。

見た人がそれらの情報を正しいと解釈すると、では他の情報も正しいのではないかと思ひ込む可能性がある。

知事 の 存在意義とは

こうした情報が選挙結果を左右してしまうほどの影響力を持つのは、選挙の公正性を歪めるものであり、容認することはできない。もちろん、和田氏が村井氏に肉薄したのはそのような村井氏を糾弾するデマ情報が要

因だつたわけではなく、私から見れば、その強引なリーダーシップへの反発と多選への批判という要因が大きかった。そこにデマ情報に漬けた要因があったことも否めない。

私は、現在の村井氏に関しては正直評価していないし、批判的な視点で見ることが多い。もちろん、一四年前の未曾有の震災時のリーダーシップは確かに素晴らしかった。この人でなければ成し得なかつただろうこともいくつもあつたのは事実である。

ただ、この人の問題点は、その成功体験が捨てられなかつたことである。平時に戻つて、丁寧に合意形成を積み重ねていかなければいけない場面でも、相も変わらずトップダウン型のリーダーシップを振りかざしてばかりで、正直うんざりすることが多かった。

その典型が、最近だと四病院再編問題だった。再編の対象の一つとなつた仙台市の南隣の名取市にある県立精神医療センターでは、病院の方々が、地域の人たちと一緒に、長い時間を掛けて長期入院の患者が地域で支えられながら暮らしていく地域移行支援に取り組んできた。最初は反対していた地域の人たちも、今は病院の人たちの一緒に支える側に回るまでになつている。四病院再編では、この県立精神医療センターは仙台市を挟んで北隣の富谷市に移転することにされた。そうし

たそれまでの努力を無にするような遠方への移転転である。病院の近くで通院しながら地域での暮らしを送つていた患者はいつたどうなるのか、このようなちよつと考えれば分かりそうな無謀な、机上でのごっこをつくつてここに移せばいいよねと考えたときか思えないような稚拙な計画を前面に押し出してを進めようとするのは全く理解できなかった。

県の審議会も当然反対したが、その時の村井氏のセリフが忘れられない。「どのよう な意見が出て私の考えは変わらない」と言い放つた。このような独善ぶりが反発を招いたことは想像に難くない。こういうのがあと四年続くことにうんざりしていた人は多分、私以外にも多くいたものと思う。

この四病院再編問題にしても、同じように反発が強かつた県美術館移転問題にしても、知事は事務方が立てたプランを体を張つて進めようとしただけだと、擁護する声もある。ただ、それならそれで問題である。もしそうだとすると、事務方のプランを、民意がどこにあるか確認せずに進めようとしたことになるからである。事務方にとつては、自分たちの立てたプランを一生懸命進めようとしてくれる頼りがいのあるトップということになるのかもしれないが、決してそのようなことを望んでいない側からすると、なんだそれはいふ話にな

る。そこに事務方の知り得ない民の声を反映させるのでなければ、知事の存在意義はどこにあるのか。

県美術館は今の場所での建物でということになり、県立精神医療センターは名取市に留まることになつたのは、そうした民意の勝利ではあつたが、そもそも最初からそうした声に耳を傾けてさえいれば、そうした無用な反発もなかつたはずである。

地元紙の果たした役割

今回、真偽不明なウェブ上の情報を押し返すことができたのは、地元紙河北新報のお手柄である。同紙は、ウェブ上の情報を取り上げ、これに詳細な解説とともに正しいかどうかの情報を提供するファクトチェックの記事をウェブページと紙面に掲載した。これはこうした地方選挙における地元紙の新たな役割を示したとも言える画期的な取り組みであつたと言える。

これまでマスメディアは、特定の候補者に肩入れしていると思われたいために、選挙戦が始まると踏み込んだ報道をしない傾向があつた。SNSなどでの真偽不明な情報は、そうしたマスメディアの腰が引けた姿勢に付け込んだものと言える。

特定の候補者に与しないことと、出回っている情報が正しいかどうかを発信することは両立するはずである。今回河北新報はメディアとしての矜持を大いに示したと思う。ただ、一方の

和田氏からは、こうしたファクトチェックが村井氏に関するものだけだつたことについて、「著しく公平性が欠如する」と批判した。これは「理あると言わざるを得ない。和田氏によれば、氏もまた村井氏の支持者からデマや誹謗中傷を受けたと明かしている。和田氏に関するそうした情報はファクトチェックの対象とせずに、村井氏に関する情報だけをとり上げるのは確かに公正とは言えない。その点では今後に課題を残したと言えるだろう。」

今回の選挙で注目したのは投票率である。今回の投票率は四六・五〇パーセントで、四年前の前回の選挙の五六・二九パーセントを大きく下回つた。村井氏と和田氏の論戦でマスメディアにも大きく取り上げられ、県民の関心も高かつたのかと思いきや、投票率で見ると前回よりも地元の関心はさほどでもなかつたことが伺える。前回選挙では、現職の村井氏に医師の故長純一氏が挑む、一騎打ちの選挙であり、今回ほど注目されることはなかつた。ちなみに、そのさらに四年前の選挙でも投票率は五三・四四パーセントであつたので、今回投票率が五割を割り込んだのは状況からしても「異常事態」と言える。いったいどうしてこのような結果になつたのか。

選挙に足を運ばなかつた有権者の思いとしては、嫌気が差したということがあつたのではないだろうか。現職はこれ以上支援したくない、かと言って真偽不明の情報に基づいて他の候補者を支持するのも憚られるという、どちらにも与したくない思い。いわば消極的ながらも良識ある判断が、この低い投票率に現れているのではないかと推察する。

品のない振る舞いは多選ゆえか

二期で鳥取県知事を辞めた片山善博氏は、「最初は職員が耳の痛いことも言ってくれたんですが、8年もやると誰もモノを言わなくなるんです」と言う。同じく三重県知事を二期で辞めた北川正恭氏も、多選は「新しい価値創造が出来なくなり停滞します」と言っていた。片山氏は、多選について「県庁の組織が停滞し、活力を失うことがいちばんの弊害でしょう」とも言っている。「権力は腐敗する」という言葉通りで、生鮮食品と同じく新鮮さを保つための努力が欠かせない。

その意味で村井氏の姿勢はどうなのか。知事選で辛くも当選が決まつた直後の代表インタビューでは、「苦しかった選挙」と振り返り、涙ぐむ様子も見せながら、「丁寧に県民に寄り添う形で皆さんに耳を傾ける県政を初心に帰つてやりたいと思います。かなりワンマンだとか傲慢だとか言われたので。謙虚にいきたいと思います」と殊勝に語つた。前回も同じようなことを言っ

ていたので、あまり信用はできないのではと思つたが、その後の言動には文字通り仰天した。対立候補の和田氏を応援した参政党について、「選挙が終わつたらノーサイド、野党ではありますが第三の政党ですので、ご相談に行くこともあると思います。機会があればお会いしてお話したい」と言つた直後に、大きく舌を出したのである。

この振る舞いは何を意味するのか。普通に解釈すれば、「そんな気はさらさらないけどね」という意思表示に映る。辞書の意味でも舌を出す行為は、「陰で人をばかにしたり、あざけり笑つたりする。また、そういうときの動作」とある。支援者に囲まれて、当選した嬉しさのあまりに本音が出たのか。支援者から笑い声が上がったが、インタビューは何とも言えない表情をしていた。

一月五日の定例記者会見で舌を出した理由を記者に問われた村井氏は、「神谷さんに私の気持ちを分かってくれるかなという思いを伝えたかつたんです」と答えている。「分かつてほしいということを全てこの舌に集約をしたということです」とも言っている。県庁に批判の声が多数寄せられていることについて、「勘違いされた人が多いみたいですよ」と答えているが、「舌を出す」という行為が世間一般的にはそのように捉えられるということとを村井氏は知らなかつた

東北の発展に向けたアクションを

今回の選挙ではネットの力をまざまざと見せつけられた。旧来型の政治家はネットでの選挙戦を不特定多数を相手にする「空中戦」として位置づけ、特定の有権者を対象とした「地上戦」とは異なるものと考える傾向があつた。しかし、ネットはもう一つの「地上」である。これを制しない者は今後、当選が危うくなるばかりか、今回の村井氏のように、デマや不正確な情報の訂正に追われる羽目になる。村井氏も、「AIむらい」など作つて悦に入っているのではなく、まずはXなどのアカウントを作つて自ら情報発信に努めてはどうか。

ただ、私が唯一、かすかに期待しているのは、「村井政策集二〇二五」にある項目である。県政運営の基本姿勢として、「素直な心で衆知を集める など」というのはほぼ期待していないのでスルーするとして、「宮城・東北の発展に向けた新たな地方創生への挑戦」として、「東北をリードし、けん引するみやぎの実現」を挙げている。具体的な中身は残念ながら不十分と言わざるを得ないが、この姿勢こそは宮城県知事には必要である。この点についてどのようなアクションを打ち出すか、そこはほのかに期待しつつ見守りたいと思う。

執筆者紹介

大友浩平
(おおもともこうへい)
奥州仙臺の住人。普段は出版社に勤務。東北の人と自然と文化が大好き。趣味は自転車と歌と旅。
「東北ブログ」
http://blog.livedoor.jp/anagma5/

Facebook
https://www.facebook.com/kouhici.oortomo



意識的「総マタギ回帰」の道へー 東北の森で銃を担うという事

鉄砲、という存在について考えている―これまでも軍艦について書いたり、同じ個人の扱う飛び道具として弓について綴った事もあるが、鉄砲・銃についてはあまり東北という土地と関連づくとは思えず、本誌では扱わずにきた。否、実は決してそんな事はないのだが、やはり「男の趣味」的な色合いの強さから、軍艦以上にマニア的な話に終始しそうな予感があったのである。しかし最近、俄かに「銃と東北」について想いを馳せざるを得ない状況になってきた―という感覚が危機感とともにあるので、あらためてここにそのテーマを掲げてみたいと思う。

※



奥羽越現像氏紹介

一九七〇年山形県鶴岡市生。札幌、東京を経て、全国の旅の末、仙台に移住。どの本屋に入っても、とりあえず郷土本の棚に向かつて立ち読みを始めると東北好きである。

今、私含む多くの一般の東北人にとって最も身近な鉄砲・銃たる存在はおそらく火縄銃である。これは何も東北のみならず全国的な事で、明治初期に軍事的西欧化の為一旦途絶えた火縄銃の古式流派が後に各地で復興し、祭事などで演武が披露されるようになったものである。個人的には地元山形県は鶴岡・上山王（日枝）神社の女性のみの砲術隊である荻野流「桜隊」や昨年に宮城県でも新たに旗揚げとなった、やはり女性からなる丸森鉄砲隊を含め仙台青葉祭などで集結する伊達藩所縁の各地の鉄砲隊が最も身近ではある。

の人物による実銃射撃の実演動画をよく観る程だ。単に銃好きといつても様々なタイプが存在し、第二次世界大戦以降の自動小銃や機関銃、現行の拳銃・猟銃に詳しい層などが多い一方、私のように新しい物には興味がなく西部劇で活躍するような十九世紀アメリカ製造の構造的にシンプルな銃が断然好きだという層も少なからず存在する。そうした銃は火縄銃ほど骨董的ではなく、現行の拳銃やライフル銃の基本の構造を備えた、現実の生活の道具たり得るものであり、愛好者であつた漫画家・松本零士氏の言葉を借りれば「荒野を己の身一つで切り開いていった男の武器」であつた―つまり一応の「文明人・近代人」が未知の原野に挑む、という感情移入しやすい背景が、「男のロマン」的な魅力を醸成してきたのだと言えよう。

しかしながら、いくら男のロマンとは言え、「いい大人」ならば大抵は自身の人生・生活にリアリティのないものへの執着はかなり薄れていくものである。私の場合も「西部の銃」に対する執心は、現在専らフィクションの世界での注目という形に限られている、と言える。ところが、そうした中でもやや現実的な存在感を持つ一挺の銃がある―『シャープス・ライフル』として知られる小銃だ。これは実は一発撃つたら一発

ずつ込めるといふ単発銃で一般的な西部劇で活躍する連発拳銃やライフル銃より少し昔に民間で普及したもののだが、単発故に多量の火薬を詰めた強力な薬莖を使用でき、また優れた精度で極めて遠方の大型獣類を仕留める事も可能な事からバツファロー・ライフルの異名を持った。何故この銃に魅かれるかといえは、実は他ならぬ東北に縁のある銃だから、という事もある。時代は幕末、かの戊辰戦争において、我が庄内藩は米国からこのシャープス銃を六百挺購入した、と記録にある。奥羽越の同盟では会津・長岡、西南でも薩摩などが仕入れているが、会津藩・山本八重の所持した連発銃スペンサーライフルよりも火力・信頼性に勝る本銃は特に庄内藩軍の快速撃に貢献、その精強振りに一役買った存在であつた。現在にも通用する狙撃銃として今も尚復刻版として製造が続いており、無論日本でも銃免許があれば所持可能である事から、特別に個人的にもリアル感覚を持つてる銃と言えるのである。

ところで単発銃といえば日本では何と言つても『村田銃』が有名だ。元は、兵装統一を図つて日本初の国産軍用銃として開発され、間もなく連発銃が登場すると急速に置き換わり民間に払い下げられていったもので、特に猟銃として東北から越後の山間に活躍するマタギらの愛用するところとなった。現在の感覚で考えれば、怖るべき猛獣である熊を相手に一発しか撃てない鉄砲では危険極まりないようだが、古来江戸期よりマタギの世界ではかの火縄銃が広く使われており、各部品や火薬・弾丸など製造の分業が成立していた為に当初は村田銃ですら導入に難色を示されたと言われる程であつた。火縄銃に長年馴染んだマタギにとつては後装式で一発撃つたらずぐ次弾を込められるだけでも村田銃は随分と便利で贅沢な武器であつた事だろう。

この熊という猛獣に対しての「単発」であるという事は是非は、マタギが登場するフィクションの世界で昔から繰り返し触れられてきた。矢口高雄の漫画『マタギ』及び『マタギ列伝』後藤俊夫監督・西村晃主演の映画『マタギ』そして近年の野田サトルの漫画『ゴールデンカムイ』などにおいてである。共通する思想としては、「連発銃だ何度も撃てると油断する。唯一発に集中し、仕留める覚悟が必要である」という事「人間に有利過ぎる便利な銃では、撃たれた熊も浮かばれない」つまり単発銃が「相手と戦闘能力的に対等である事が、殺生を許される条件である」という、自然と人間の力関係のバランスを象徴する文言で、これらの場面によって本銃がマタギ

の哲学そのものになつていった可能性を示唆している、と言えよう。

矢口氏による『マタギ』には物語の世界観の軸となる興味深い「裏設定」がある―マタギの高性能銃の獲得により乱獲が加速する山野の獣たちを絶滅から救う為、山間深くに獣たちを保護・育成するシステムを構築した幻のマタギ一族の存在だ。主人公である里のマタギ青年が衝撃を受け「俺たちは養殖された熊を狩っているのか」と苦悩する場面が印象的だ。

無論全くのフィクションではあるが、マタギの存在意義を問う核心的発想であり、これは発表当時現実に深刻であつた自然破壊や動物乱獲と絶滅への危機感の反映であつたと思われる。

これを読む現代人は何を馬鹿な―と鼻で笑うかも知れない。まさに令和の今、現実のマタギと山を取り巻く状況はおそらく当時の想定外、あまりに相違したものである―メガソーラー建設という新たな自然破壊の形はあれど、燃料としての木材需要の低下や人口減少で森林環境は回復かそれ以上の飽和状態となり、狩猟対象であつた熊や鹿も一転して保護対象となつて頭数制限の枷を外された彼らは急激に山中で増加、絶滅どころか年間何千頭捕殺しても追いつかぬ程の出没数、果ては今年、列島の誰もが



『マタギ』矢口高雄
ヤマケイ文庫の新装版より

周知の熊の市街地に及ぶ異常な出没頻度に加え、人間を恐れぬばかりか積極的に襲撃し食害するというかつてない恐るべき事態・・・一体、日本の山に何が起きているのか？そして、マタギはどこにいるのか？

北海道のヒグマ、本州のツキノワグマともに現在の状況は五年前に予測されていたと兵庫県立大学教授・横山真弓氏は言う。かつて西日本では、マタギならぬ「ハンター」らによる乱獲により絶滅が危ぶまれた事で保護政策に転換、それが事情の違う東日本・東北にまで波及し、結果森林の規模や環境の違いから来る施策や調査方針のズレとともに狩猟文化を主軸とするマタギの生業をも衰退へと追いやつていく。施策が早く行われた西日本では頭数管理もでき安定したが、東日本から北海道では調査年の間隔が広く、個体数の推定も正しくできなかった。五年前より警鐘を示すも受け止められず、一昨年の異常出没で大量に駆除するもその翌年に手を緩めると今年再び異常発生―また人里に降りた個体を見逃した事で彼らの優れた学習能力とその認識を同族間で共有する情報能力が後年の市街地への異常出没に繋がったのではないか、とも推察する。

横山氏によれば、一昨年は全国で二万頭近く熊を捕殺するもそれでも追いついていない事から、五年前の推定より実際の頭数はずつと多く、今年は全国で十萬頭近くになつていてのではない―との事である。

その熊の出没と被害が最も深刻なのが皮肉にも、マタギの発祥地且つ聖地とされた秋田県であつた。事態を重く見た鈴木県知事は防衛省に自衛隊派遣を要請し受諾されるが自衛隊法により銃火器は使用できず、専門ハンターの「後方支援」的野外作業に丸腰状態で臨むという形となつて批判や心配の声が相次ぐ一方、警察ではライフル使用を可能とすべく動き出す、という状況で戦闘のプロは一体どちらだったか？と国民が混乱に陥る様相もある。

―ざつと既に多くの人が知であらう経緯や状況を綴つた訳だが、筆者などが特に提案できる妙案などは無い―とにかく、ひたすら駆除して、個体数を減らしてやるしかないのだろう。

只、秋田にはメガソーラーによる森林破壊は少ないのでそれが原因ではない―と結論づけるのも違和感がある―今回の災害の真髓が自然の怒り・森からの復讐



ランタンとしし踊り



夕暮れの裸木



霜の朝



夜明け前の遠野

シリーズ 遠野の自然
「遠野の立冬」
遠野 1000 景より

今夏の異常な暑さも、秋口になっても依然として暑かったこともまるで数年前の出来事であったかのよう
に、このところ、急激に寒くなってきた。
遠野では最低気温が氷点下
のときもめずらしくなくな
ったようだし、霜が降り
る朝もあるようだ。
夏が暑い年は冬の寒さが
厳しいと言われる。今年
はそうやって、雪もたくさん
降るのだろうか。
それにしても気がかりな
のは、例年だと冬眠するは
ずのクマが今年は冬眠せず、
エサを求めて街中を徘徊し
ないかということだ。
そうなったら大変なこと
になる。そうならないこと
を切に祈るのみである。



夕暮れ時の白鳥



今秋のチョウ



最近見つけたキノコ



ツチグリ



写真でお伝えする
東北の風景
「釜石まつり 2024」
写真撮影 尾崎匠

